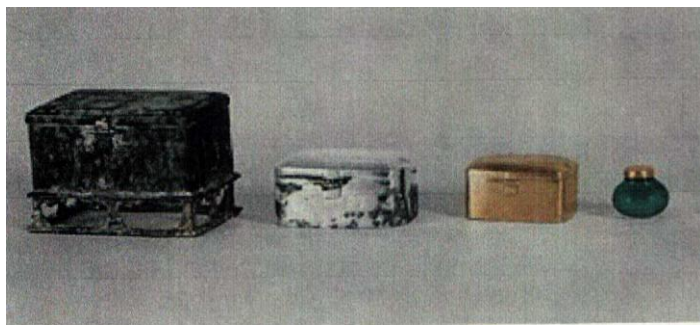


崇福寺跡から出土した品



崇福寺跡から無文銀銭と共に出土した舍利蔵器（左）。
無文銀銭はこの脚部に並べられていた。

崇福寺跡からの出土品にあった無文銀銭



大津市・崇福寺跡出土の無文銀銭 <近江神宮蔵>

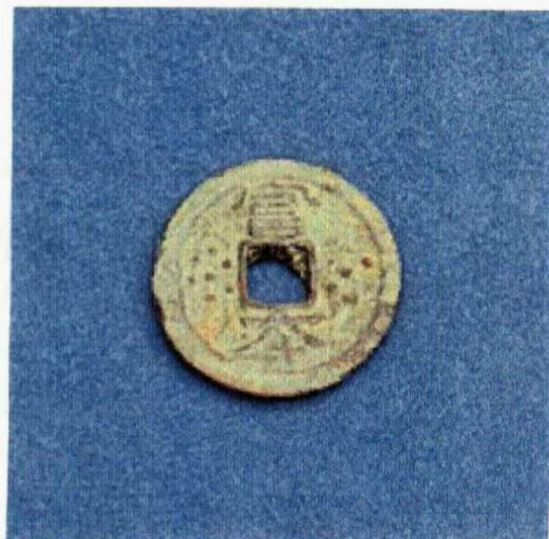
これまで最古といわれていた和同開珎



金沢市サコ山遺跡出土の和同開珎 <京都国立博物館蔵>

省略いたします。

日本最古といわれる富本銭



富本銭:大福遺跡（奈良県桜井市）出土銭

桜井市立埋蔵文化財センター展示。



富本銭と鋳竿（複製品）、貨幣

「崇福寺跡について」

天智天皇勅願による崇福寺跡は滋賀県大津市にある飛鳥時代から室町時代にかけて存在した寺院の遺跡です。比叡山が南に延びる3つの尾根にまたがって建築群があり奈良時代末期に建立された梵釈寺の複合遺跡とする説明が有力です。この崇福寺跡から出土した品の中に無文銀銭12枚が道かりました。内1枚は紛失しましたが、紛失したことについての話がありますが、

「無文銀錢について」

これまでに最古の貨幣は和同開珎（708 年和銅元年）であると歴史で習いましたが、その後 683 年（天武天皇 12 年）に作られたとされる富本銭（森海例会で桜井の出土地を訪れています）が見つかりました。この銭貨は実際に流通したのか、厭勝銭（えんしょうせん・まじないなどに使われる銭）として使われたかについては学説が分かるところです。この富本銭よりさらに 9 年前の（672 年）に天智天皇の近江京で貨幣として使われたのが無文銀錢でした。その後 683 年 4 月 15 日にこれより銅銭を用い、銀銭を禁止するとの詔がだされた。この詔で禁止されて銀錢が無文銀錢であったと考えられます。

無文銀錢をよく見ると、古いお金の特徴である四角形の孔（あな）がなく、小さな孔があいています。また貨幣には文字も書かれていません。貨幣には銀片を貼り付けたり X 印や田印をいれたりして不揃いな印象を受けることで後の銅銭が鑄造してつくられた規格品なのに対してこの無文銀錢は銀板をたたいて成形したようです。銀片を付けたのは重さをそろえようとしたもののようです。しかし、重さを調べてみると 8 g から 10 g までのばらつきがあります。この無文銀錢は禁止の詔が出るまで、大阪、奈良、京都、滋賀、三重の関西地方を中心にした 15 遺跡ほどに出土例があります。11 枚とまとまって出土した崇福寺跡の無文銀錢は大変貴重です。

「近江京について」

近江大津京と言われるが京としての機能が十分でないため近江大津宮とか大津宮、志賀の都と表記される、本来の表記は、水海大津宮（おうみのおおつのみや）であったとの指摘もある。1974 年以降の発掘調査で滋賀県大津市錦織の住宅地で宮の一部遺構が確認された。

天智天皇 6 年（667 年）に飛鳥から近江に遷都した天智天皇はこの宮で、正式に即位し、近江令や庚午年籍など律令体制の基礎となる政策を実行した。天皇崩後に朝廷の首班となった大友皇子（弘文天皇）は天武天皇元年（672 年）の壬午の乱で大海人皇子に敗れたため、5 年余りで廃都となった。

「馬頭観音について」

近世以降国内の流通が活発化し、馬が移動や荷物運びの手段として使われることが多くなった。これに伴い馬が急死した路傍や芝先（馬捨場）などに馬頭観音が多く祀られ、動物への供養塔としての意味合いが強くなった。山中峠を越えて下っていた林道右手に馬頭観音と書いた標識があります。下見の時には行ってませんが、下記の写真のような石仏ではないかと思います。

馬頭観音（ハヤグリーヴァ）は仏教における信仰対象である菩薩の一尊のこと。ハヤグリーヴァとは「馬の首」の意である。これはヒンドゥー教では最高神ヴィシュヌの異名であり馬頭観音の成立に置けるその影響が指摘されている。他にも「馬頭明王」、「大持力明王」など様々な呼称がある。



インド神話のハヤグリーヴァ

ハヤグリーヴァ



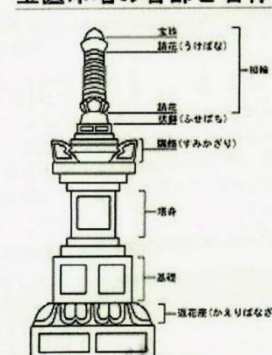
馬頭観音



山中町の宝篋印塔

「宝篋印塔について」

宝篋印塔の各部と名称



参考例：鳥山重保塔（神奈川県鎌倉市）
参考文献：鎌倉子ども版土曜講座「宝篋印塔」鎌倉市教育委員会
日本古来の塔の文化（1998 東京堂出版）
宝篋印塔の各部と名称（図は関東形式）

宝篋印塔や六地藏は町や村の境目によくおかれています。この宝篋印塔は中国の呉越王弘祝叔が延命を願って、諸国に配った 84000 塔が原型とされている。

「白川道・山中越え、志賀越え」について

今回の古道歩きは山中町 BS から歩きますが、この道は鴨川にかかる荒神橋から始まっています。橋の袂から斜め方向の道を進んで行くと京都大学にぶつかります。左に進み百万遍通りを直進すると吉田神宮の裏側を進み子安観音前を通過し疏水を横切り進んで行く北白川天神社が右手にあります。さらに道を進むと府道 30 号線に合流していきます。進んで行くと白川沿いに御殿車があります。昔この辺りに水車があったそうです。車の通行が多い 30 号線を登っていくと左手に身代わり不動がありさらに進むとラジウム温泉車道を登っていくと山中町に入っていきます。

江戸時代末期の白川道を描いた絵地図を見てみると白川道の始まりである荒神橋から斜めに進む道と尾州藩屋敷にぶつかります。尾州藩屋敷は以前にはなく道はまっすぐにつながっていましたが、江戸末期に各藩は京都に屋敷を立てたのです。そのため道が曲げられてしまいました。

幕末京都絵図

